

学生と地域住民協働の町づくり

～コミュニティデザインを参考にして～

広島大学 総合科学部 1年 藤原 佳祐

目次

1 序論

- 1.1 学生と地域住民が相互に関わっていないデメリットとその原因
- 1.2 学生・地域住民協働の町づくりのメリット
- 1.3 研究課題とその目的

2 方法

山崎亮さんのコミュニティデザインの手順と事例の分析と西条で学生がコミュニティデザインを行う場合の課題と利点の考察

3 結果

- 3.1 コミュニティデザインの手順
- 3.2 コミュニティデザインの事例
- 3.3 コミュニティデザインを西条で学生が行う場合の課題と利点

4 考察

- 4.1 地域住民主体の重要性
- 4.2 山崎さんと学生が行うコミュニティデザインの区別
- 4.3 西条でコミュニティデザインを実現していくためのプランニング
- 4.4 実践経過と今後の研究課題

5 総括

6 引用・参考文献

序論

1.1 学生と地域住民が相互に関わっていないデメリットとその原因

広島大学は西条駅とは離れた場所にあり、下見地区は大学生のエリアになっている。大学はもちろんのこと、スーパー、居酒屋、カラオケ、コンビニなどどこに行っても大学生ばかりである。こういった特色のある地域だからこそ学生のマナーのなさや常識の低さがよく目立っている。例えば、居酒屋の前でおう吐し寝転がる、自転車をどこにでも停める、歩きスマホをする、バイトの店員がお客様に関係なく大声で話すなど様々である。しかしそれに慣れてしまい誰も何も言わなくなってしまう。大学を卒業し、社会に飛び出したとき広大生は社会の中で今までの常識が通じず、大きな不安を抱えることになるだろう。私の一年間を振り返ると、いつも学生とばかり集まっていて内向き志向が働き、刺激を得る機会も少なかった。また県外から入ってきたこともあって地域住民に対する壁を感じ、盆踊り等の催しには入っていくことができなかった。あいさつをすることさえはばかることもあった。

一方、地域住民は自治協議会などのコミュニティがあり、学生とはほとんど関係のない形で生活を送っている。そのため学生と交流する機会が少なく、西条の町の良さを伝えることができている。西条はお酒という伝統的な文化があるが、学生たちにはほとんど伝わっていない。若者の酒離れが進んでいるなかで若者に認知してもらうチャンスを逃してしまっている。また西条は農業、特に米作りが盛んである。日本全体で農業の後継者不足が叫ばれているが、ここでも若者に農業の魅力を伝えることができている。外国人留学生も毎年数多く来日しているが、少しでも日本の良さ・西条の良さを伝えることができているだろうか。広島は被爆をした歴史があり、その歴史を学生は授業等で耳にはするものの、直接当時を知る人々からお話を聞く機会も少ない。そういった歴史もうまく受け継いでいないのが現状である。

このように学生、地域住民それぞれが独自のコミュニティで生活を送っていてデメリットを多く抱えている。では何が原因であるのだろうか。私は学生と地域住民が関わる機会がほとんどないことが原因だと思う。イベントなどもそれぞれのコミュニティだけを対象としているものが多い。そのためお互いに相手に対するマイナスなイメージを勝手に膨らませてしまっている。学生は地域のことには興味がないだろう、地域住民は学生と関わりを求めているだろうといった感じである。それがさらに学生と地域住民を遠ざけてしまっている。

1.2 学生・地域住民協働の町づくりのメリット

そうした原因を踏まえると、学生と地域住民が交流することがその解決につながると考えられる。その交流をする上で有効な手段が学生と地域住民が協働で町づくりを行うことだと思う。地域の問題を共有し、それを解決するために共に協力しあうことで信頼関係が生まれ、上で述べたデメリットも解決することができるだろう。それだけではな

く、他のメリットも得ることができる。学生の立場で考えてみると異世代の方たちと関わる場合には当然礼儀が必要になる。あいさつ、名刺交換、服装、お礼の電話やメールなど社会の中で必要なことを学生のうちから学ぶことができる。また異世代の方と関わる場合、同じ学生には通じても伝わらないことも出てくる。その際に相手を理解する力やコミュニケーション能力も磨かれていく。地域住民の方たちからすると地域の祭り等に学生に参加してもらうことでより盛り上げることができるし、若者ならではの発想や視点を得ることができるだろう。イベントを開催する際には学生にパソコンで広告を作ってもらったり、重い荷物を運んだりしてもらうことでスムーズに運営することができるだろう。また学生に西条の酒文化に親しんでもらうことで、学生が地元に戻った際にこれ以上ない宣伝効果になるだろう。高齢者は学生とお話をするだけでとても喜んでくださる。高齢者にとってはいいお話相手であるし、学生にとっては様々な知恵を学ばせていただく機会にもなる。このように学生と地域住民が協働で町づくりを行い、交流を深めていくことで win-win の関係が生まれる。

1.3 研究課題とその目的

以上のことから学生と地域住民が協働で町づくりを行っていくことの意義をわかっていただけたと思う。そこで「どのようにして学生と地域住民協働の町づくりを行えるか」という問いを研究課題にする。そして学生と地域住民協働の町づくりを通して、学生と地域住民の交流を活性化させ、デメリットを改善しメリットを生かすことを目的とする。

2. 方法

山崎亮氏のコミュニティデザインの手順と事例の分析と西条で学生がコミュニティデザインを行う場合の課題と利点の探求

研究課題では「どのようにして学生と地域住民協働の町づくりを行えるか」を挙げたが、山崎亮氏のコミュニティデザインを参考にしてその課題について考えてみようと思う。

山崎氏は日本の全国各地で50以上のコミュニティづくりに関わり、住民主体の手法で地域を活性化させている。山崎氏の事例をみてみると、住民が積極的に自分の地域にできることを考え、実行し、いきいきと生活を送っている。ここに西条の学生と地域住民が協働で町づくりを行えていないという課題を解決するヒントが隠れているのではないかと思う。

そこで本研究ではまず山崎氏のコミュニティデザインの手順と事例を分析していきたい。そしてコミュニティデザインを西条で学生が行う場合どのような課題と利点があるのか考察していきたい。

3. 結果

3.1 コミュニティデザインの手順

コミュニティデザインはよく言われる「地域住民主体」を本当に実現している。全体の流れを下に示していく。

1. 現地に出向いてヒアリングを行う。

地域の人々に「どんな活動をしているのか」、「その活動で困っていることはないか」、「ほかに興味深い活動をしている人がいたら紹介してくれないか」などの質問をして地域の情報を調べ、地域の間人間関係を把握しどんなことをすればいいのか思い描いていく。それと同時にたくさんの人と交流を深めていく。

2. ワークショップを行う。

十分に地域の情報が集まったところで、ワークショップを行っていく。その内容は、まずじゃんけん大会などのアイスブレイクを行い参加者同士の緊張を解いていく。次にBS法、KJ法、ワールドカフェといったいくつかの話し合いの手法を用いて地域の課題や具体的なビジョン、やってみたいプロジェクトなどを住民同士で話し合っていく。その際に山崎氏は自分の考えているアイデアをすぐに述べず、話し合いの方法やテーマを決めるだけで、あくまで住民に寄り添うような形でサポートしていく。このワークショップを複数回開催し、考えをまとめていく。

3. チームビルディングを行う。

様々なプロジェクトが出そろったところで、チーム作りをしていく。参加者には自分の興味のあるプロジェクトに自由に参加してもらう。そしてそれぞれのチームの中で、プロジェクトを実施していくようになる。この際にそれぞれのチームの中で役割分担や助け合い、リーダーシップなどが求められていく。

4. 活動支援を行う。

活動のための準備や役割分担に関し相談にのったり、行政などの経済的支援を受けられるような体制づくりを支援したりする。支援を行うのは主に初期段階で少しずつ減らしていく。チームの中で様々な課題を乗り越えていくことでよりチームとしての結束力が強まっていく。

3.2 コミュニティデザインの事例

大まかなコミュニティデザインの概要を明らかにしたところで実際の事例について述べていきたい。愛媛県の南部の宇和島市には総延長約 1.5km の宇和島商店街がある。この場所は、かつて「おまち」と呼ばれ、行き交う人同士の肩がぶつかり合うほど、多くの人でにぎわっていた。そんな「おまち」、そして宇和島全体ににぎわいを取り戻すため、地域のみなさん一人ひとりができることを考え、実行していく場として「おまち会議」がスタートした。おまち会議の実施に先立ち行ったヒアリング調査では、広い道幅や雨もしのげる全面アーケードが商店街の魅力としてあげられた一方で、「緑が少ない」「みんなの集う場所がほしい」「子どもを遊ばせる場所がない」という地域の課題も多く聞かれた。これらの魅力を活かし、課題を解決するために出された方向性が「通り

の公園化」であった。商店街を、緑があふれ、人々が集い、憩うことのできる「公園」のような場所にしていくために、4回の「おまち会議」を実施した。その中で、商店街や宇和島全体の魅力や課題を整理したり、参加者のみなさんが商店主の方々にインタビューしたりし、「おまち」の現状を共有した後、商店街でやってみたいこと、できそうなことについて意見を出し合った。さらに、たくさん出たアイデアの中から、特に優先して取り組みたいテーマを投票形式で決定し、飲食チーム、展示チーム、子育てチーム、学習チーム、お店とコラボチーム、鑑賞+緑の6つのチームに分かれた。そして具体的な企画を実現するための話し合いをスタートさせ、実際に活動を始めている。以上が具体的なコミュニティデザインの例である。話し合いの進行を行っているのは山崎氏であるが、その話し合いで意見するのは住民であり、出てきた課題に対する解決策を考えるのも住民である。そしてプロジェクトを実行に移していくのも住民である。徹底的に住民主体で進めていき、山崎氏はそのサポートを行っているだけである。

3.3 西条で学生がコミュニティデザインを行う場合の課題と利点

ここからは西条で学生である自分たちがコミュニティデザインを行っていく場合の課題について考えていきたい。山崎氏の場合、様々な地域問題を抱えるある地域からの要請があつて現地に入っていく。一方学生の場合は地域からの要請がない上に、西条は人口が年々増加していて過疎地域のような危機的意識が低いため、学生にすぎるしかないといった状況ではない。そのため私たちがいきなりワークショップをするから来てくれと呼びかけをしてもその反応は小さい。さらに学生は大学の授業との兼ね合いもあり、ワークショップの規模も限られていくことになる。そうなると西条全体というより、地域づくりに興味のある人たちだけの活動になってしまう。また山崎氏の場合、第三者的な立場で既存のある程度信頼関係の構築されたコミュニティにおいて話を進めていくことができるが、西条において学生も地域住民に含めて話し合いを行う場合、もともとの地域住民と学生とのつながりが少ないため話し合いがスムーズに進んでいきにくい。さらに年上の方が多いため学生が山崎氏と同じように進行役としてしきっていきにくい。西条の地域住民の方とお話をする中でよく言われるのは「学生は継続性がない」ということである。4年経つと大半の学生は地元や県外に出て行ってしまうため、2、3年は継続できても、後輩に同じような志の人を見つけることができなければそれで終わってしまう。この懸念が住民の方たちの中にとっても根強くある。

一方で学生ならではの利点もある。これは私が山崎氏の講演会を聞きに行った際に、直接教えていただいたことであるが、山崎さんは仕事としてコミュニティデザインを行うため、どうしても地域住民からするとお金儲けの匂いが漂い、思いがそのまま受け取られにくいという。しかし学生の場合、地域に入り込む際に、お金目的ではないので学生の思いを素直に受け取ってくれやすいという。例えば野菜の作り方を教えてほしい、地域住民の方ともっと関わりたいなどといったことをお願いするときに、とても快く承

諾してくれる。また西条は広島大学があるため若者の人数が毎年一定数確保される。その意味で学生の中でトレンドになっているものを地域のイベントや活動などに取り入れることで一気に発展していくことになる。そのトレンドをつかめるのは学生である自分たちだけであり、大きな強みである思う。さらに学生が活動を行っていくことはそれだけで若い、新しい、創造的、などといった強いメッセージ性があり注目されやすいし、学生は社会人ではないため社会の目はまだ温かく、失敗を恐れず次々に新しい試みを行っていきやすい。

4. 考察

4.1 地域住民主体の重要性

東広島市は平成22年2月に「東広島市市民協働のまちづくり指針」を策定し、多様な主体がお互いに連携し・協力した町づくりを進めてきている。しかし西条に限らず、日本の一般的な町づくりではこのように行政が地域住民に一方的に働きかける形が多い。それに対し住民は不満を言うくらいで実際にその町づくりに関わっていない。町づくりは本来そこに住む住民がしていくものなのに、行政という地域づくりの専門家に頼りっきりになっている。それだと本当に地域住民が輝いていくことができない。暮らしを充実させていくためには、圧倒的多数の地域住民や学生が本当に主体となって自分たちの町づくりを始めていかなければならない。だからこそそれを実現させているコミュニティデザインを参考にしていくべきである。

4.2 山崎氏と学生が行うコミュニティデザインの区別

ただ、コミュニティデザインを西条で実行しようとする、解決すべき様々な課題がある。地域住民の中に学生と地域づくりを協働で行っていかなくてはならないという意識が低い、学生の働きかけることができる範囲が狭い、地域住民と学生が話し合う際にしきっていきにくい、などである。だから山崎氏が行うコミュニティデザインは山崎氏だからこそ実現できていて、私たち学生が行う場合のコミュニティデザインと区別しなくてはならない。しかし山崎氏のやり方に固執せず自分たちなりに努力して地域住民の方と共に地域づくりが行えていければいいと思う。実際、自分たちの住む地域についてみんなで協力し合い、できることを考えて実行していくことはとても楽しいことである。まるで高校の運動会のようにお金がもらえることもないが、ただ楽しいからみんな熱くなってがんばってしまう。そういった町づくりの楽しさを共有することで少しずつ地域づくりの輪を広げていくことができるのではないか。

4.3 西条でコミュニティデザインを実現していくためのプランニング

西条で学生がコミュニティデザインを行う上で、課題や利点が出てきた。その課題や利点を反映させつつ、西条で学生がコミュニティデザインを行うためのプランを具体的に考えていきたい。課題で述べたとおり、地域住民と学生の間につながりがないため、

いきなりワークショップを行うことはできない。そのためまず地域住民との信頼関係づくりを行っていききたい。第一段階として地域住民が主催する酒まつりなどのイベントに積極的に参加していく。ただお客さんとして参加するのではなく、お手伝いできることがあれば進んで行いイベントを盛り上げていく。そこで地域住民や西条のことを知ることに加えて自分たちのことも知ってもらい少しずつ距離を縮めていく。第二段階として地域住民主催のイベントに参加するだけでなくその企画と一緒に関わらしていただく。もっとこうしたら良くなるといった学生目線の意見も取り入れてもらい、新しい風を吹かせていく。この段階では地域住民の立場が上である。第三段階としてイベント自体を同じ立場で協力し、新しく生み出していく。この段階において初めてワークショップの手法が生きてくる。

4.4 実践経過と今後の研究課題

続いて実践経過について述べていく。現在、私は友人二人と共に第一段階に取りかかっている。具体的には酒蔵通りの方や住民自治会の方、市役所の方、西条で地域関連活動をしている市民サークルの方などとお話をしたり、イベントのお手伝いをさせていただいたりして交流をしている。最初は自分たちを受け入れてくださるかとても不安だったが、私たちが地域にもっと関わっていききたいと伝えると「こんな学生さんもいるのだね」ととても好意的に受け止めてくださった。さらに私たちが地域のイベントに招待していただいたり、おもしろい活動をしている方を紹介していただいたりした。また会場を設営したり写真を撮ったりするなどの仕事をお手伝いすると「とても助かるよ、ありがとう」と感謝され、とても嬉しかった。そしてもっと地域に関わりたいという思いが強まってきている。自分たちが思っていた以上に西条には学生の需要があり、学生が入っていき貢献できる場所はまだまだ眠っていると感じた。

今年の春休みには山崎氏の会社である studio-L でインターシップを経験し、ワークショップのやり方やすでに行われている事例などをしっかり吸収してくる予定である。そして学生であることの利点や学生だからこそできることをさらに探っていききたい。

今後は地域に関心のない学生や住民をいかにして巻き込んでいけるかが課題である。そのために学生と地域住民が自然と知り合い交流を深めていけるような仕組みづくりの研究をしていかなければならない。現在西条では「くらら」という市民交流拠点が建設途中であるが、コンサートなどのイベントだけでなく、日常的に地域住民が利用できる施設にしていけばいいと思う。敷居を下げて誰が何をやっていい空間が求められている。

5. 総括

どのように学生と地域住民協働の町づくりを行えるかを考えてきたが、結局のところ、町づくりは人がメインであるため、人とのつながりをいかにして結んでいけるかが鍵だ

と思う。私が西条に関心を持ったのは酒蔵通りを舞台にした授業がきっかけであった。そこから地域の方と関わるようになった。そうしたきっかけ作りを工夫しながらやっていくことで、小さなつながりが多くできていくと思う。それが結果的に大きくなって地域全体としてまとまった進み方ができていくのではないか。その第一歩をまず学生が踏み出していきたい。

6. 参考文献

・山崎亮（2012）『コミュニティデザインの時代』中公新書 255pp

・『街なかのにぎわいを！「おまち会議」』

<http://www.city.uwajima.ehime.jp/www/contents/1380766797335/index.html>

（2015/1/25 最終アクセス）

・『スタジオ・エル プロジェクト』

<http://www.studio-l.org/project/>

（2015/1/27 最終アクセス）

・『統計でみる東広島2014 東広島ホームページ』

<http://www.city.higashihiroshima.hiroshima.jp/soshiki/7/toukeisyo2014.html>

（2015/1/27 最終アクセス）

・東広島市 企画振興部 地域政策課 『市民協働のまちづくり 第2期行動計画』

24pp